

『韓国語教育研究』(第3号)別刷

ISSN 2186-2044

【研究論文】

韓国語未完了アスペクトの第一言語習得過程における
誤用の分析

柳 朱燕

日本韓国語教育学会

2013年9月

韓国語未完了アスペクトの第一言語習得過程における 誤用の分析

柳 朱燕

本稿は韓国語の未完了アスペクト形式-ko iss- / -a iss-の第一言語習得過程で見られる誤用を調査し、誤用のパターンとその原因について分析したものである。本研究では、韓国語における未完了アスペクトの第一言語習得過程を明らかにしたRyu and Shirai(2012)で使用した言語データを用い、3人の子どもが発話した192の未完了アスペクト文から三つの誤用文を抽出し、分析を行った。意味役割と文法的機能の側面から分析すると、子どもは意味役割に応じて正しく未完了アスペクト形式を使っていたものの、自他動詞の区別による未完了アスペクト形式の選択に困難を抱えていることが明らかになった。また、言語習得過程の側面から分析すると、言語習得スタイルの個人差が見られたものの、同じパターンの誤用を産出したことと、誤用を犯した動詞を同じ時期に沢山使っていたことが分かった。研究の結果から、子どもの動詞句の習得において、自他動詞の区別は容易でないことが分かり、自他動詞の区別は未完了アスペクトの習得に欠かせない重要な先行段階であることが示唆される。

1. はじめに

本研究は動詞句の習得について、特に未完了アスペクト形式-ko iss- / -a iss-の習得に焦点を当て、韓国語子ども達が自分の母語である韓国語の未完了アスペクト体系を習得する際、どのような誤用を犯すかを明らかにすることを目的としている。子どもが未完了アスペクトの体系を習得するのは、ある動詞を学ぶ時に、その動詞が他動詞であるか自動詞であるか、そしてその動詞に接続する未完了アスペクトはどのような意味役割（動作の継続、結果の状態）と文法的機能（自動詞+-a iss-、他動詞+-ko iss-等）を有するか、そして、意味役割と文法的機能がどのように結び付けられるかを身につけることである。動詞の意味が分かるだけでは、正しい文を生み出すことができないということになる。本研究ではこの点についての議論を、韓国語未完了アスペクトの第一言語習得過程に関する先行研究を振り返りながら概観し、子どもの誤用から見られるパターンが習得過程にどのような新たな解釈を与えるかを考察していく。

本原稿では、まず、韓国語の未完了アスペクトの体系について説明した上、本研究には欠かせない、韓国語未完了アスペクトの第一言語習得過程を明らかにした先行研究 Ryu and Shirai(2012)を紹介する。また、研究方法と結果では、どのようなデータからどのような誤用が見られたかを具体的に示す。最後に本研究の結果が韓国語未完了アスペクトの習得過程にどういった解釈ができるかを考察する。

2. 韓国語の未完了(imperfective)アスペクトの体系

日本語の「テイル」は「動作の継続」と「結果の状態」という意味役割を同一の形式で表すが、韓国語は「動作の継続」と「結果の状態」を区別し、それぞれに-ko iss-及び-a iss-という別々の形式を使う。「動作の継続」は、動作の進行または反復進行を表し、アスペクト形式として-ko iss-を使う。一方、「結果の状態」は、動作が行われた後の状態で、その動作の結果が持続していることを表す。韓国語の場合、「結果の状態」を表す際、-ko iss-と-a iss-の両方をアスペクト形式として使うが、主動詞が他動詞である場合は-ko iss-を、自動詞である場合は-a iss-を使う(Lee, 1991)。

表 1. 韓国語の未完了アスペクト形式 (柳, 2011)

	自動詞	他動詞
動作の継続	-ko iss-	-ko iss-
結果の状態	-a iss-	-ko iss-

「動作の継続」を表す-ko iss-の例を挙げる。本稿では本研究の分析データである実際の子どもの発話を例として用いる。言語データは Yun、Jong、Joo という 3 人の子どもの発話で、その発話が出た時期を(3:3) (3 歳 3 ヶ月) のように表記する。(1a)では「食べる」という動詞に-ko iss-が接続して動作の進行を表している。しかし、「動作の継続」を表す際、韓国語ではアスペクト形式-ko iss-のみならず現在形(-nun/n)も使える。つまり、日本語の「テイル」又は、英語の「be -ing」は「動作の継続」を表す際、義務的に使用されるが、韓国語の-ko iss-は選択的に使用され、現在形が「動作の継続」も表せるドイツ語やほとんどのロマンス語と同じ特徴を持つ。以下の例文(1a)(1b)は「ご飯を食べている。」という同じ状況を描写している。

(1) a. 밥 먹고 있어.¹ (Joo 3;3)

pap mok-ko iss-e
ご飯 食べる-進行相-陳述
「ご飯 (を) 食べている。」

b. 밥 먹는다.

pap mok-nun-ta
ご飯 食べる-現在-陳述
「ご飯 (を) 食べている。」

次に、「結果の状態」を表す-ko iss- / -a iss-の例を挙げる。(2)では「座る」という動詞が自動詞であるため、-a iss-を接続し、「座る」という動作の結果が持続する「結果の状態」を表している。(3)では「かぶる」という動詞が他動詞であるため、-ko iss-を接続して「結果の状態」を表している。「結果の状態」の-ko iss-に結びつく代表的な動詞は「着用・姿勢」を表す動詞である。たとえば、「입다 iptā (服を着る)、끼다 kkita (指輪をはめる)、쓰다 ssuta (帽子をかぶる)、감다 kamta (目を閉じる)、숙이다 swukita (頭を下げる)」などの動詞が相当する。

(2) 코끼리 코끼리 코 앉아 있어. (Jong 1;11)

khokkili khokkili kho anc-a iss-e
像 像 擬態語 座る-結果相-陳述
「ゾウさん、ゾウさん、ちょこんと座っている。」

(3) (왕관) 쓰고 있어요. (Jong 1;11)

(wangkwan) ssu-ko iss-eyo
(王冠-対格) かぶる-結果相-陳述
「(王冠) かぶっている。」

¹ 本稿で用いる韓国語の用例の提示は「韓国語-yale式表記-グロス-日本語訳」の順に示し、韓国語の「-고 있-」と「-아 있-」、日本語の「テイル」のみ下線()で示す。

言語習得研究の分野では、テンス・アスペクトの習得は動詞の性質と強い相互作用があると主張している。ここでは動詞の種類によって韓国語の未完了アスペクトの意味役割がどのように決まるかを説明し、実際の例を挙げながら、韓国語の特徴について論じる。特に動詞の性質、即ち、「動詞の内在アスペクト(inherent aspect)」については、Vendler (1967)による動詞の分類を本研究では用いる。Vendler が提案した動詞分類は State (状態) Activity (活動) Accomplishment (達成) Achievement (到達) の四種類である。「アスペクト仮説 (the Aspect Hypothesis; Andersen & Shirai, 1994) 」では、学習者又は幼児は過去形態素の使用を「到達動詞」、「達成動詞」から「活動動詞」、「状態動詞」へ、そして、進行形態素の使用を「活動動詞」、「達成動詞」、「到達動詞」へと発展させていくと主張している。

表 2. 「アスペクト仮説」 (the Aspect Hypothesis, Shirai, 1995)

形態素	発達順序						
過去/完了	到達動詞	→	達成動詞	→	活動動詞	→	状態動詞
動作の進行	活動動詞	→	達成動詞	→	到達動詞		

「アスペクト仮説」の主張に沿って韓国語未完了アスペクトの習得過程を見てみると、韓国語における進行形の形態素は「-ko iss- / -a iss-」であり、その習得は活動動詞から始まり、達成動詞又は、到達動詞に進むという予測が立てられる。韓国語では、未完了アスペクトの意味は大まかに「動作の継続」と「結果の状態」に分けられ、活動動詞又は達成動詞が未完了アスペクト形式「-ko iss-」に接続して「動作の継続」意味を、到達動詞が未完了アスペクト形式「-ko iss- / -a iss-」に接続して「結果の状態」の意味を表す。韓国語の未完了アスペクトの意味を動詞の内在アスペクトによってまとめると、表3のようになる。

表 3. 動詞の内在アスペクトによる韓国語未完了アスペクト体系

	動作の継続	結果の状態	
韓国語	-ko iss-	-ko iss-	-a iss-
	活動動詞、達成動詞	他動詞	自動詞
		到達動詞	到達動詞

表3では、未完了アスペクト体系を、動詞の内在アスペクトにより分類して表したが、それはあくまでも主な傾向であり、表2に沿わない例もある。達成動詞でも「結果の状態」の意味を表す場合があり、本研究では, 가다 (kata、行く)、올라가다 (ollakata、上がる) などの動詞がその例に挙げられる。例文(4)と(5)では、韓国語で가다 (kata、行く) という動詞がアスペクト形式によって「動作の継続」又は「結果の状態」の意味になるのを示している。韓国語의가다 (kata、行く) という動詞は、日本語と異なり、「-ko iss-」と接続して「動作の継続」の意味を表すので、日本語の訳には「テイル」が使えない。本研究では가다 (kata、行く)、올라가다 (ollakata、上がる)、오다 (ota、来る)、내려오다 (naylyeota、降りる) などの移動動詞を達成動詞に分類している。

(4) 수영장 가고 있어요 . (Yun 2;9)

swuyengcang ka-ko iss-eyo

プール 行く-進行相-陳述

「プールに行くよ。」

→ 「動作の継続」

(5) 바퀴가 올라가 있어 . (Yun 3:0)

pakhwi-ka ollak-a iss-e

タイヤ-가 上がる-結果相-陳述

「タイヤが上がっている。」

→ 「結果の状態」

また、(6)と(7)の例文のように、쓰다 (ssuta、書く) という他動詞と、쓰이다 (ssuita、書かれる) という自動詞(受身形²)がペアになっている場合、他動詞が「-ko iss-」と接続して「動作の継続」の意味を、自動詞が「-a iss-」と接続して「結果の状態」の意味を表す。「結果の状態」の意味を表す際、日本語訳は「他動詞+テアル」と「自動詞+テイル」の両方が可能になる。他動詞と自動詞のペアになる動詞は、

² 쓰다 (ssuta、書く) と、쓰이다 (ssuita、書かれる) の関係を「他動詞-自動詞」の関係に見るか、「他動詞-受身形」又は「他動詞-使役形」の関係に見るかは学者によって異なる。しかし、「開ける-開く」のように受身形ではなく、固有の自動詞を持つ動詞もあり、本稿ではこのような動詞を、「他動詞と自動詞のペアになる動詞」と命名し、「他動詞-自動詞」の関係として捉えている。

「열다-열리다 (開ける-開く)、닫다-닫히다 (閉める-閉まる)、붙다-붙이다 (付く-付けられる)」などの動詞が相当する。本研究では他動詞と自動詞のペアになる動詞を到達動詞に分類している。

(6) 글씨를 쓰고 있어 .

kulssi-lul ssu-ko iss-e

字-を 書く-結果相-陳述

「字を書いている。」

→ 「動作の継続」

(7) 여기 뭐라고 써³ 있어요 ?

(Yun 2;11)

yeki mwelako ss-e iss-eyo

ここ 何と 書かれる-結果相-陳述

「ここに何と (書いてあるの/書かれているの) ?」 → 「結果の状態」

3. 韓国語の未完了アスペクトの第一言語習得に関する先行研究

Ryu and Shirai(2012)では、韓国語を母語として習得している3人の子ども(Yun, Jong, Joo)から、1歳半から3歳半までの2年をかけて自然発話データを収集し、未完了アスペクト形式-ko iss- /-a iss-の習得過程を明らかにした。Ryu and Shirai(2012)で収集した言語データを本研究でも使用するの、言語データの詳細は研究方法の章で詳しく述べる。言語データは全部で81時間15分の自然発話であり、その中から研究の対象である「未完了アスペクト」を子どもが産出した163文と養育者が産出した2,092文、合わせて2,255文を分析対象とした。分析の結果、各子どもが始めて未完了アスペクト文を使った年齢、即ち、初出年齢は1歳11カ月から3歳3カ月までで、早い子供と遅い子供の間で1年4ヶ月の差があるが、遅い子どもでも3歳3カ月までには未完了アスペクト形式を使用しているということが分かった。表4は、柳(2011)から引用したもので、データを収集した全期間で、各子どもが未完了

³ 「써」は「쓰이다」の活用形である「쓰이어」が「쓰여」・「씩어」に縮約され、さらに「써」に短縮されたと考えられる。한글 맞춤법 第38項では「쓰여」・「씩어」だけを縮約形として認めているが、本稿では子どもの発話(会話形)に基づいているので、「쓰여」・「씩어」の縮約形として「써」を認め、表記する。

アスペクトをどのように産出していたかを示したものである。また、表4では、初出前と初出後で期間を分けており、インプットの影響を調べるため、養育者の未完了アスペクトの使用パターンも集計して示してある。

表4 各子どもによる全期間での未完了アスペクト使用数及び使用比率 (柳, 2011)

Jong	初出前		初出後								
	子ども	養育者	子ども								
	1;3-1;10	合計	1;11	2;0	2;1	2;2	2;4	2;7	2;8	2;9	2;10
ko iss 進行	N/A ⁴	51(64)	2	1	2	0	2	0	0	0	2
ko iss 結果	N/A	9(11)	2	1	1	3	0	0	0	1	1
a iss 結果	N/A	20(25)	1	3	2	1	2	3	1	2	4
合計	0	80(100)	5	5	5	4	4	3	1	3	7

	初出後									養育者 合計(%)
	子ども								合計(%)	
	2;11	3;0	3;1	3;2	3;3	3;4	3;5	合計(%)		
ko iss 進行	3	3	0	0	2	0	1	18(29)	203(40)	
ko iss 結果	4	0	0	0	1	1	1	16(26)	66(13)	
a iss 結果	0	0	1	1	1	1	5	28(45)	233(47)	
合計	7	3	1	1	4	2	7	62(100)	502(100)	

Joo	初出前		初出後									養育者 合計(%)
	子ども	養育者	子ども									
	1;9-3;2	合計(%)	3;3	3;4	3;5	3;6	3;7	3;8	3;9	3;10	合計(%)	
ko iss 進行	N/A	401(62)	2	1	0	3	3	3	1	0	13(36)	133(63)
ko iss 結果	N/A	90(14)	0	0	0	1	2	2	0	0	5(14)	15(7)
a iss 結果	N/A	152(24)	1	0	2	9	1	1	0	4	18(50)	62(30)
合計	0	643(100)	3	1	2	13	6	6	1	4	36(100)	210(100)

⁴ 「N/A」はNot Applicable (該当せず) の略語で、初出前の期間に該当発話が観察されていないことを表す。

Yun	初出前		初出後						
	子ども	養育者	子ども						
	2;3-2;6	合計(%)	2;7	2;8	2;9	2;10	2;11	3;0	3;1
ko iss 進行	N/A	35(42)	1	3	3	1	1	2	1
ko iss 結果	N/A	15(18)	2	0	0	2	2	0	2
a iss 結果	N/A	33(40)	0	1	0	0	2	2	0
合計	0	83(100)	3	4	3	3	5	4	3

	初出後								養育者 合計(%)
	子ども							合計(%)	
	3;2	3;5	3;6	3;7	3;8	3;9			
ko iss 進行	6	0	1	7	3	0	29(45)	289(50)	
ko iss 結果	0	0	0	0	0	0	8(12)	79(14)	
a iss 結果	0	2	9	2	9	1	28(43)	206(36)	
合計	6	2	10	9	12	1	65(100)	574(100)	

以上の結果から、未完了アスペクトの習得過程に関しては、次の3点が分かった。

①子どもの未完了アスペクトの使用

子どもの習得過程は分析データの全期間(2年)と最初の10例が出てくる初期段階の二つの期間で分析した。全期間での子どもの未完了アスペクトの使用は、3人とも「結果の状態」(「-ko iss-結果」と「-a iss-結果」)を「動作の継続」の方(「-ko iss-進行」)より多く使っていた。最も初期の未完了アスペクト習得過程を見るために、Diessel & Tomasello (2000)に倣い、各子どもの使用した未完了アスペクト文を初出のものから10例ずつ取り出して分析した。Yunは「動作の継続」の方(「-ko iss-進行」)を多く使い、JongとJooは「結果の状態」(「-ko iss-結果」と「-a iss-結果」)の使用が多いことが分かった。従って、初期段階での未完了アスペクト習得は、「アスペクト仮説」に沿う子どもが一人、沿わない子どもが二人という子どもによって個人差が見られる結果が得られた。

②養育者の未完了アスペクトの使用

収録全期間における養育者の未完了アスペクト使用を分析してみると、養育者は3人とも「-ko iss-進行」、「-a iss-結果」、「-ko iss-結果」の順に多く使用していることが分かった。しかし、Joo の養育者はほかの二人より「動作の継続」の方（「-ko iss-進行」）を多く使っていた。

③養育者の発話（インプット）の影響

インプットの影響を調べるため、子どもと養育者の使用パターンを比べた結果、Jong は養育者よりも2倍多く「-ko iss-結果」を使い、Joo は養育者が「-ko iss-進行」を多く使ったものの、「-a iss-結果」を多く使っており、未完了アスペクトの使用において養育者と子どもの使用パターンには関連性が見られなかった。従って、インプットの影響は大きくないと考えられる。

以上の結果から、Ryu and Shirai(2012)では、「動作の継続」の意味から習得するパターン(Yun)と、「結果の状態」から習得するパターン(Jong, Joo)の二つのパターンが見られ、韓国語の未完了アスペクトの習得過程は「アスペクト仮説」に従うと言えないと考察している。

4. 韓国語の未完了アスペクトの習得過程における誤用の調査

4.1 研究課題

本研究では韓国語の未完了アスペクト形式-ko iss- / -a iss-の習得過程で見られた誤用を分析し、子どもが未完了アスペクトを習得する際、どこを難しく感じて、どこを乗り越えなければならないかを明らかにし、未完了アスペクトの習得過程に新たな解釈ができることを目的としている。Corder(1967)では「誤用」を以下のように説明している。

学習者の誤用は否定されるべき対象ではなくて、習得プロセスのなかで、必然的に生じる性質のものである。また、それらの誤用は経済背の原理に動機付けられた学習者固有の規則に拠って生み出された生産的なものである。

(訳：橋本 2006)

子どもは言語習得の開始期には、聞き取った言葉をそのまま「丸暗記」的に産出する。しかし、子どもは、あたかも人間の言語が様々な「規則」の体系によって機能することをあらかじめ知っているかのように、一定の習得段階以後、積極的に「規則」を探し求め、自分なりの「規則」を形成しては、それを実際に使用して試すことを繰り返す。言語現象の様々な局面で観察された類推(analogy)のプロセスを、子どもはこの時期に集中的に応用し、習得すべき言語の正しい規則が何であるか、次々と「仮説」を形成しては、それを検証していると考えられる。この「規則」＝「仮説」の検証過程で、子どもはしばしば「過剰な一般化」による間違いをおかす。すなわち、子どもは「規則」の適用範囲にかかわる制約を無視して、見つけ出した「規則」を最大限に適用しようとする。そこで生み出す間違いを我々は「誤用」と呼ぶ。Corder(1967)でも言ったように、我々は誤用を通して子どもがどのような「規則」を立てていて、どのような習得プロセスを辿っているかが分析できる。「誤用」の分析を通して、本研究で明らかにしたい研究課題は以下のようなものである。

研究課題：

未完了アスペクト形式-ko iss- / -a iss-の習得過程で見られる誤用の特徴を明らかにし、第一言語として韓国語未完了アスペクトの習得過程を解明する。

4.2 研究方法

本研究では、韓国語を母語として習得している子ども3人を対象とし、二語文が徐々に作れるようになる時期である1歳以上2歳半未満にデータの収集を始め、言語発達の手遅れになる3歳から4歳までの時期まで、約2年間データの収集を行った。子どもの言語発達において、二語文(例、牛乳+ちょうだい、リンゴ+食べるなど)が作られることは、大きな意味を持つ。子どもが二語文を産出できる時期から、語彙の数は急激に増加するようになるし、統語の発達や形態の発達が始まると考えられる。3歳から4歳になると、新しい語彙の産出は落ち着くし、母語として文法知識はある程度完成するようになる(岩立・小椋、2005)。データは2009年2月から取り始め、2年後の2011年2月に収集が終わった。データ収集対象児の詳細は表5にまとめる。

表5 データ収集対象児の詳細

	Jong	Joo	Yun
生年月日	2007年12月	2007年5月	2006年11月
性別	男	女	男
兄弟の有無	妹	姉	なし
データの年齢	1;3~3;3	1;9~3;9	2;3~4;3

幼児言語データは養育者と子どもが絵本を読みながら対話する場面に設定し、ビデオカメラで収録した。絵本は、普段養育者が子どもに読んであげている家にあるものを使い、特に指定はしていない。子どもがリラックスして、なるべく自然な発話が取れるように収録場所を対象児の家とした。養育者の範囲は母親だけではなく、父親、祖母、祖父までとした。しかし、実際収録したデータでは、主に母が子どもと話をしている。母との会話場面が全部の収録量から占める割合は、Jong が 91%、Joo が 95%、Yun が 100%である。本研究では養育者の数が複数であっても一人としてみなして叙述する。1 か月 1 時間のペースで収録し、2 年間で 24 時間のデータを集めるように計画を立てた。データ収集後、ビデオ撮影したものを文字化し、コーパスとして使えるようにテキストファイルで保存してある。当初 1 か月 1 時間のペースで 2 年間収集する計画を立てたが、実際集められたデータは計画より多い。1 歳半から 3 歳半までの子どもは、集中力を持って同じ場所にずっといられる子どもがいるものの、すぐ興味を失い、新しい遊びにチャレンジする子どももいる。養育者は収録にあたり子どもの都合や機嫌に合わせて収録時間を調節するので、1 か月 1 時間より多めにデータを撮っており、データの収集に協力的であった。また、Yun の場合、最後の 6 ヶ月間のデータは Yun が 3;10~4;3 の期間であり、未完了アスペクトの習得が随分進んでいる段階であると判断し、本研究では分析に利用しなかった。従って、最終的に Jong は 2 年 2 カ月(31hr37min)、Joo は 2 年 1 カ月(29hr2min)、Yun は 1 年 6 カ月(20hr36min)のデータを分析対象とした。

本研究で利用したデータは全部で 81 時間 15 分の自然発話であり、各子どもと養育者の発話数は表 6 で示した。しかし、韓国語の未完了アスペクト文は数が少なく、養育者にとってもあまり産出しない、即ち、使用頻度が極めて低い項目であること

が分かる。表 6 を見ると、養育者の使用頻度は 0.02~0.045 で、100 文の内 2 文か 4 文が出る位の低い使用比率を示している。子どもの使用頻度は養育者よりさらに低い結果である。本研究では、子どもが産出した 163 文を分析対象とする。研究結果でも示すが、その 163 文の中から誤用文が 3 文出ており、その文章を分析していく。3 文の誤用は非常に少ない数であるが、未完了アスペクト文の使用頻度が極めて低いことを考えると、3 文の誤用は非常に貴重な資料である。

表 6 分析データから見た未完了アスペクトの使用頻度

	未完了アスペクト 発話数(a)		全体発話数(b)		使用頻度 (a/b)	
	子ども	養育者	子ども	養育者	子ども	養育者
	Jong	62	582	13,764	28,761	0.005
Joo	36	853	11,965	27,149	0.003	0.031
Yun	65	657	6,326	14,713	0.010	0.045
合計	163	2,092	32,055	70,623	0.005	0.030

4.3 結果

本節では、子どもたちが未完了アスペクト文を産出する際、間違っ使用した誤用について分析を行う。誤用を分析することは、習得上の困難点を探すことにつながり、誤用の変化は習得過程の解明につながる重要な問題を意味すると迫田(2002)は述べている。そこで、本節では子どもの発話データから誤用を抽出し、どこを間違っているのかを分析する。3 人が産出した未完了アスペクト文は全部で 192 文であり、その中で観察された誤用は Jong が 1 文、Joo が 2 文で全部 3 文の誤用が観察された。次の例文(8)、(9)、(10)に誤用の文を挙げる。

- (8) 문 열어 있는 것이 싫어 . (正用 : 열려 있는) (Jong 2;8)
 mwun yel-e iss-nun kesi silhe
 ドア 開く(他動詞)-結果相 a iss-連体形 のが いやだ
 「ドアが開いているのはいやだ。」

- (9) 여기 여기 공주님 문이 닫아 있어요 . (正用 : 닫혀 있어요) (Joo 3;6)
 yeki yeki kongcwunim mwuni tat-a iss-eyo
 ここ ここ 王女様 ドアが 閉める(他動詞)-結果相 a iss-陳述
 「ここ、ここ、王女様、ドアが閉まっていますよ。」
- (10) 여기는 넘어 있었지 ? (正用 : 넘고 있었지?) (Joo 3;6)
 yekinun nem-e iss-ess-ci
 ここは 超える(他動詞)-結果相 a iss-過去-疑問
 「ここは超えていたんでしょう?」

5 考察

5.1 意味役割と文法的機能の側面からの誤用分析

意味役割というのは言語形態素が表す意味のことで、本研究では未完了アスペクトが表す「動作の継続」と「結果の状態」の意味が、発話者の意図に応じて正しく使われていたかを分析する。上記の例文(8)、(9)、(10)では各子どもが、ドアが開いている状態(8)、ドアが閉まっている状態(9)、そして、何かが超えている状態(10)を、説明しようとしている。従って、三つの文章はすべて「結果の状態」の意味役割を持っている。子どもはそれに応じて、「動作の継続」の「-ko iss-」ではなく、「結果の状態」の「-a iss-」を使い、正しく言語形態素と意味役割をマッピング(mapping)している。

しかし、文法的機能の面から見ると、そこで誤用が起きていることが分かる。文法的機能というのは文法規則のことで、本研究では、「結果の状態」を表す際、動詞が他動詞であると「-ko iss-」を、自動詞であると「-a iss-」を、未完了アスペクト形式として使用することを表す。例文(8)、(9)、(10)を見ると、子どもたちは「結果の状態」の意味を表す際、動詞が他動詞であるにも関わらず、「-a iss-」を接続していたことが分かる。韓国語には日本語と同様に他動詞と自動詞のペアがある。例えば、열다 (yelta 開ける) と 열리다 (yellita 開く)、닫다 (tatta 閉める) と 닫히다 (tathita 閉まる) などがある。例文(8)と(9)は他動詞と自動詞の区別ができていないため、他

動詞に「-a iss-」を付けてしまった誤用である。

例文(10)의 넘다 (nemta 超える) という動詞は自動詞と他動詞両方が可能な動詞である。例文(10)の一つの文だけでは、넘다 (nemta 超える) が他動詞の使用であるか自動詞の使用であるか判断し難い。ここで、例文(10)の前後の談話を紹介し、詳しく文の内容を分析する。

(11) Joo 1 : 사과랑 배가 떨어졌어요 . (リンゴとナシが落ちました。)

Joo 2 : 아저씨도 떨어졌어요 . (おじさんも落ちました。)

Joo 3 : *여기는 넘어 있었지 ? (ここは超えていたんでしょう?)

省略文 [아저씨가 여기는(어떤 기준선을) 넘고 있었지?]

[오じさんが ここは(ある基準線を) 越えていたんでしょう]

Mom : 응 그래 넘어왔지 아저씨가 .

(うん、そう。越えてきたの、おじさんが)

Joo 4 : 넘어와서 이걸 넘어야 되는데 .

(超えてきて、またこれを越えなきゃ)

収録ビデオを分析してみると、Joo はお母さんと絵本を見ながら、リンゴとナシが落ち、おじさんも落ちたと状況を説明し、おじさんが落ちて、ある基準線(ここ)を越えていたと、経路の道が書いてある絵のある部分を指で指しながら、話をしていった。Joo 3 の文に関して省略された部分を全部入れて書くと、[아저씨가 여기는(어떤 기준선을) 넘고 있었지?] [오じさんがここは(ある基準線を) 越えていたんでしょう]の文になり、「ある基準線を越える」という他動詞の使用であることが分かる。他動詞の場合、「結果の状態」を表すためには、アスペクト形式「-ko iss-」を接続するので、Joo 3 の文は誤用の文になる。

넘다 (nemta 超える) という動詞は、自動詞で使われる場合、「○○が超える」(例: 원살이 넘었다. 백만명이 넘는다.) という意味になり、他動詞で使われる場合は「○○を越える」(例: 50%를 넘었다. 고개를 넘는다. 경계선을 넘었다) という意味になる。しかし、「結果の状態」を表す際、他動詞と未完了アスペクト形式「-ko iss-」を接続し「○○を超えている(例: 50%를 넘고 있다. 고개를 넘고 있다. 경계선을 넘고 있다.) と、自動詞と未完了アスペクト形式「-a iss-」を

接続し「〇〇が超えている」(例: 원살이 넘어 있다. 백만명이 넘어 있다.) という意味を表すことも可能であるが、未完了アスペクト形式を使用せずに、過去形を使用して「〇〇を超えた」「〇〇が超えた」という文にする場合がより自然である。また、他動詞と未完了アスペクト形式「-ko iss-」の文より、自動詞と未完了アスペクト形式「-a iss-」の文になると、さらに文法的自然さに対する受容度が低くなる。Joo 3 の場合は、正用は「여기는 넘고 있었지?」であるが、「여기는 넘었지?」のように過去形で表わすことができる状況である。従って、例文(10)の誤用が起きた原因は、自他動詞の区別ができなかったことと、自然な表現として「結果の状態」と「過去形」の選択に迷っていたことが挙げられる。

以上の結果から、すべての誤用が同じパターンの間違いであることが分かった。子どもは意味役割に応じて正しく未完了アスペクト形式を使っていたものの、自他動詞の区別による未完了アスペクト形式の選択で失敗をしていた。子どもにとっても、自他動詞の区別は習得しにくい項目であることが考えられる。また、自他動詞の区別は未完了アスペクトの習得には欠かせない重要な先行段階であることが明らかになった。

5.2 言語習得過程の側面からの誤用分析

Jong は 2 歳 8 カ月の時、誤用の文を発話し、Joo は 3 歳 6 カ月の時、二つの誤用文を産出した。これは、言語発達段階にあたって、どの段階で起きたのか、そして、その時点で自他動詞の使用はどうなっているのかを、本節で言語習得過程の観点から分析を行う。表 7 では Jong と Joo における未完了アスペクトの初出と誤用が出た時期の MLU を表した。MLU (Mean Length of Utterances, 平均発話長) は言語発達の統語的指標の一つとして Brown (1973) によって提案されたもので、単語数を発話数で割って算出する。本研究では自立語 MLU の計算法を採用し、韓国語の分かち書きを基準にして単語数を計算し、発話数で割り算をして算出した。例えば、「お母さんがリンゴを食べた。」という文を分かち書きして書くと、「お母さんが リンゴを食べた。」のようになり、一つの文章に三つの単語があるから、MLU は 3 になる。

表7 Jong と Joo における誤用が出た年齢と MLU

	Jong		Joo	
	初出	誤用	初出	誤用
年齢	1;11	2;8	3;3	3;6
MLU	2.783	2.837	2.660	3.021

Jong は初出があった 1;11 から 9 カ月後の 2;8 で誤用の文が産出されたものの、Joo は初出から 3 カ月後に誤用の文が出ている。Jong は未完了アスペクト文を初出した時と、誤用が出た時の MLU に大きな差が見られないが、Joo は初出より誤用が出た時に MLU が大幅上っている。従って、Jong と Joo の発達過程は異なる様子を見せていたと考えられる。

表 4 の全期間での未完了アスペクト使用数を参考にしながら、Jong の習得過程を見ると、Jong は他の子どもより未完了アスペクトの初出が早かったが、それなりゆっくり習得していく様子を見せている。特に誤用が出た時期になると、あまり、未完了アスペクトの文を使用していないし、MLU も大きな進展がない。しかし、それは普段の様子ではなく、活発的に使用していた未完了アスペクトの使用が一時的に減り、MLU もある時期は 3.341 まで上ったのに、誤用が出た時期は逆行して 9 カ月前の水準に戻っていた。子どもは言語習得の開始期には、聞き取った言葉をそのまま「丸暗記」的に産出するが、一定の習得段階以後、積極的に「規則」を探し求め、自分なりの「規則」を形成すると「4.1 研究課題」の節で前述した。子どもが立てた「規則」まだ、未完成で、実際の言語使用から受けたインプットや誤用の直しなどで、その「規則」は何回も修正され、最終的に言語の正しい規則を習得するようになる。Jong はこの時期、未完了アスペクトの文法体系に対して、自分なり形成していた「規則」が上手く行かないことに気づき始め、正しい規則が何であるか、次々と「仮説」を立て、それを検証しているところだと思われる。Jong があまり未完了アスペクトの文を産出しないことや、MLU が低くなったことは、正しい「規則」を探るため、誤用が出やすい言語の使用を消極的に行ったと考えられる。その後、また未完了アスペクト文の使用が多くなり、MLU が徐々に上がることを見ると、「規則」修正期では、消極的な言語使用が行われることが裏付けられる。Jong は「動作の継続」を表す時は「-ko iss-」を、「結果の状態」を表す時は「-a iss-」を使うという

言語形態素と意味役割のマッピング(mapping)を作っていたかもしれない。しかし、動詞の自他動性による言語形態素の選択では、自分なりの「規則」は正しくないことを感じながら、まだ正しい「規則」が出せない状況であった。

一方、Joo は Jong と異なる習得パターンを見せた。Joo は未完了アスペクト文の初出がかなり遅かった。初出年齢を見ると、Jong は 1;11、Yun は 2;7、Joo は 3;3 で、初出の早い子との差が 1 年 4 カ月もある。しかし、初出が遅れたものの、習得速度は速く、活発に未完了アスペクト文を産出し始め、誤用が出た 3;3 の時期では最も多く未完了アスペクト文を産出している。Joo は Jong と異なり、誤用が出た時期で積極的に未完了アスペクト文を使用している。Joo は自分なりの「規則」が間違っていることに気付きながら、誤用を避けようとした Jong の消極的な態度と異なり、誤用の直しや養育者のインプットから「規則」を徐々に修正していくという積極的な言語使用が見られた。言語発達の個人差について、ゴールドフィールドとスノー(Goldfield & Snow, 1997)は以下のように述べている。言語発達の速度が遅い子ども(本研究では Jong の場合)は、恥ずかしがりやで、注意深く、理解力はよいが、言語表出をなかなかしない、また、言語構造の細かい点に注意を払い、助動詞や構文を多く使用する。言語発達の速度が速い子ども(本研究では Joo の場合)は、喜んで危険を引き受けて、文法的誤りを頻繁に行い⁵、人々や事物を記述するのにたくさん名詞や複雑な名詞句を使用する。ゴールドフィールドとスノー(Goldfield & Snow, 1997)は言語習得における個人差の要因として、子どもの気質の差を取り上げ、このような見解を示したが、確かに本研究の Jong と Joo の習得パターンにもその傾向がみられて、適用できる点があると思う。しかし、それにもかかわらず、誤用のパターンが一致しており、言語習得のスタイルはそれぞれ違うけど、未完了アスペクトの習得過程において障害が何であるかは本研究で明らかになった。

Jong が誤用を産出した 2;8 の時、Jong は自他動詞の区別を習得していたかを習得データから分析した。誤用で出した「열다 (yelta 開ける) と 열리다 (yellita 開く)」の動詞の使用を表 8 で示した。

⁵ 実際、Joo の言語データを見ると、未完了アスペクト形式だけではなく、助詞の誤用、否定文の誤用、主語と動詞の不一致文など、他の文法事項に関しても誤用が多く観察された。「文法的誤りを頻繁に行う」という文の意味は未完了アスペクト形式に関する誤用 2 文のことではなく、一般的に文法に関する誤りが多いということの意味する。

表 8 Jong における「열다 (yelta 開ける) と열리다 (yellita 開く)」の動詞の使用

年齢	2;0	2;3	2;4	2;8 (誤用の出現)
例	열려 yelye(自)	열려 yelye(自) 열려 yelye(自)	열려 yelye(自)	열어야 yeleya(他) 열어 yele(他) 열어서 yelese(他)

Jong は誤用の文を出した 2;8 の前まで、열다 (yelta 開ける) と열리다 (yellita 開く) を両方正しく産出していた。열다 (yelta 開ける) と열리다 (yellita 開く) に関しては自他動詞の区別はできたと考えられる。しかし、自動詞である열리다 (yellita 開く) を先に習得し、他動詞である열다 (yelta 開ける) は誤用が出た 2;8 の時に産出し始め、集中的に産出している。Jong が誤用で열다 (yelta 開ける) の活用形を使ったことも、同じ時期に他動詞の열다 (yelta 開ける) を集中的に産出したことと緊密な関係があると思われる。Jong が誤用を犯した理由は、열다(yelta 開ける) と열리다(yellita 開く) の自他動詞の区別はできたが、未完了アスペクトの体系の中で、自他動詞による形態素の区別があることを分からなかったと考えられる。また、同じ時期に열다 (yelta 開ける) の使用回数が多く、その影響もあると考えられる。

Joo のデータから、誤用を犯した動詞「닫다 (tatta 閉める)」と「넘다 (nemta 超える)」の使用を調べた。닫다 (tatta 閉める) は誤用の文を出す 3;6 前まで、一回も使用したことがなく、닫다 (tatta 閉める) の自動詞である닫히다 (tathita 閉まる) も産出していなかった。従って、誤用を産出した時、Joo が닫다 (tatta 閉める) と닫히다 (tathita 閉まる) の自他動詞区別ができたかどうかは判断し難い。넘다 (nemta 超える) は誤用が出た 3;6 の同じ時期に 2 回出ており、넘어와서 (nemeoase) と넘어야 (nemeya) の他動詞の使用であった。넘다 (nemta 超える) は誤用の以前では産出がなく、Joo が넘다 (nemta 超える) の自他動詞を区別したかどうかは判断不可能である。しかし、同じ時期に使い始めた動詞の影響が大きいということは Jong のデータでも Joo のデータでも言えることである。

6. おわりに

本稿では、韓国語を母語として習得している 3 人の子どもによる自然発話データ

を基にして、韓国語未完了アスペクトの習得過程から見られる誤用を分析し、誤用の原因を明らかにした。3人の子どものデータから未完了アスペクトを使用した192文を抽出し、その中から3文の誤用文を取り出した。誤用文を意味役割と文法的機能の側面から分析してみると、子どもは意味役割に応じて正しく未完了アスペクト形式を使っていたものの、自他動詞の区別による未完了アスペクト形式の選択で失敗をしていたことが分かった。具体的に言うと、子どもたちは「結果の状態」の意味を表す際、動詞が他動詞であるにも関わらず、「-a iss-」を接続する誤用を犯していた。また、言語習得過程の側面から誤用を分析してみると、誤用文を産出した二人の子ども、JongとJooの間で異なるパターンが見られ、言語習得スタイルの個人差が議論された。Jongは言語習得の速度が遅い子に近く、恥ずかしがりやで、言語構造の細かい点に注意を払うタイプである。Jongが誤用を出した時には自分なりの「規則」を修正している様子が見られた。Jongは誤用を出す前、열다 (yelta 開ける) と열리다 (yellita 開く) の自他動詞を正しく使用していたが、未完了アスペクトの体系に迷い、誤用を犯したと思われる。Jooは言語習得の速度が速い子に近く、人と話し合うのが好きで、文法的誤りを頻繁に行うタイプである。Jongのように誤用を犯した動詞が以前どのように使われていたかなど、分析することはできなかったが、誤用を犯した動詞を同じ時期に話すようになり、その影響で誤用が生じたと考えられる。

以上の結果から、未完了アスペクトの習得過程で見られる誤用のパターンに、自他動詞の区別による未完了アスペクト形式の選択の間違いという共通点があることが明らかになった。子どもにとっても、自他動詞の区別は習得しにくい項目であることが考えられる。また、自他動詞の区別は未完了アスペクトの習得には欠かせない重要な先行段階であることが示唆される。

しかしながら、本研究及びRyu and Shirai(2012)で使われた3人の幼児言語データは、大変貴重でありながら、研究の結果を一般化するにあたって、人数が充分であると言えないところがある。今後、韓国語を母語として習得する子ども達を対象にした発話データが多数収集されることを期待している。また、未完了アスペクトの習得のみならず、テンスやモダリティーの習得など、動詞句をどのように習得していくか調査を行うことや、動詞の分類と習得順序の関連性について分析することを視野に入れつつ、今後さらに研究を多角的に進めていく必要があると考えられる。

参考文献

- 岩立志津夫・小椋たみ子(2005)『よくわかる言語発達』ミネルヴァ書房
- 迫田久美子 (2002).『日本語教育に生かす第二言語習得研究』株式会社アルク
- 柳朱燕 (2011).「第二言語として韓国語の未完了アスペクトの習得過程と教授方法：日本人母語話者を中心に」『韓国語教育研究』 第1号 64-81.
- 橋本学 (2006).「第二言語学習者の誤用に関する分析を第二言語教育に生かすための予備的考察」『岩手大学人文社会科学部紀要』 第78号 105-113.
- Andersen, R. W. & Shirai, Y. (1994). Discourse motivations for some cognitive acquisition principles. *Studies in Second Language Acquisition*, 16, 133-156.
- Brown (1973). *A first language : The early stages*. Harvard University Press.
- Corder, P. (1967). Significance of learners' errors. *International Review of Applied Linguistics*, 5, 161-169.
- Diessel & Tomasello (2000). The development of relative clauses in spontaneous child speech. *Cognitive Linguistics*, 11, 131-151.
- Goldfield, B. A. & Snow, C. E. (1997). Individual difference: Implications for the study of language acquisition. In J. G. Berko (Ed.), *The development of language*. Allyn and Bacon. pp. 317-347.
- Lee, H.S. (1991). *Tense, aspect and modality: A discourse-pragmatic analysis of verbal suffixes in Korean from a typological perspective*. Unpublished doctoral dissertation, University of California, Los Angeles.
- Shirai, Y. (1995). Tense-aspect marking by L2 learners of Japanese. In D. MacLaughlin & S. McEwan (Eds.), *Proceedings of the 19th Annual Boston University Conference on Language Development: Vol. 2* (pp. 575-586). Somerville, MA: Cascadilla Press.
- Ryu, J. Y. & Shirai, Y. (2012). The First Language Acquisition of the Korean Imperfective Aspect markers *-ko iss-/a iss-*. *Japanese/Korean Linguistic 21*: 267-281.
- Vendler, Z. (1967). *Linguistics in philosophy*. Ithaca, NY: Cornell University Press.

* 本研究は平成22年度採用日本学術振興会科学研究費補助金特別研究員奨励費(課題番号：22・8054)の助成を受けたものである。

(東北大学大学院 国際文化研究科 GSICS フェロー)

韓国語教育研究（第3号）

2013年9月15日 発行

発行者 姜 奉植
発行所 日本韓国語教育学会
〒161-853 東京都新宿区中落合 4-31-1
目白大学外国語学部韓国語学科
編集者 『韓国語教育研究』編集委員会
文慶喆、柳朱燕、金恵鎮、金鉉哲、宋貞熹
印刷所 株式会社 仙台共同印刷